

方丈記 鶴長明

行く河のながれは絶えずして、しかも本
の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、
かつ消えかつ結びて久しくとどまりたるた
めしなし。世の中にある人とすみかと、ま
たかくの如し。玉しきの都の中にむねをな
らべいらかをあらそへる、高き賤しき人の
すまひは、代々を経て盡させぬものなれ
ど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし
家はまれなり。或は去年焼けて今年作れ
り。或は大家ほろびて小家となる。住む人
もこれにおなじ。所もかはらず、人も多か
れど、いにしへ見し人は、二三十人が中

に、わづかにひとりふたりなり。あしたに死し、ゆふべに生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、いづかたより來りて、いづかたへか去る。又知らず、かりのやどり、誰が爲に心を惱まし、何によりてか目をよろこばしむる。そのあるじとすみかと、無常をあらそふとも、いはゞ朝顔の露にことならず。或は露おちて花のこれり。のこるといへども朝日に枯れぬ。或は花しほみて、露なほ消えず。消えずといへども、ゆふべを待つことなし。

※テキストは、インターネット上の図書

「青空文庫」をもとにして加工しました。